OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	テンボ語の親族名称
Author(s)	梶, 茂樹
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 1997, 7, p. 53-77
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71087
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

テンボ語の親族名称

梶　茂樹

1　はじめに

本稿は、アフリカ、ザイール共和国の東部に話されるテンボ語(Tembo)の親族名称の概要を述べることを目的とする。テンボ語は、いわゆるバンツー系の言語で、周辺のフンデ語(Hunde)、シ語(Shi)、ハヴ語(Havu)、ルワンダ＝ルンディ語(Rwanda-Rundi)などと系統的に近い関係にあり、親族名称もこれらの言語と多くの共通点を持っている。とはいえ、この地域のバンツー系諸語の親族名称について書かれたものは、語彙集などの付録としてついているものを別にすれば、ほとんどなく、本稿でこれを概説することは、バンツー語研究一般にとっても意味があると思われる。

テンボ語の親族用語[1]は、日本語やヨーロッパ諸語に見られるものとは大きく異なる。例えば、「父」「母」などエゴ（＝自分）に近い部分で、人称によって、用語が音韻的に全く異なるものがある。また、テンボ語の親族用語は、人類学で類別的(classificatory)タイプと呼ばれるものであり、例えば父、母を指す用語は、それぞれ日本語で言うオジ、オバの一部も指しうる。ただし、こういったことはテンボ語にのみ見られることではなく、多くのバンツー系諸語に共通する特徴でもある。従って、テンボ語の体系について述べることは、たんにテンボ語およびその周辺言語のみにならず、広くバンツー諸語の体系に目を向けることにもなる。以下、比較のため、適宜、フンデ語などの周辺言語や地域共通語であるスワヒリ語の形にも触れることにする。

話を始める前に一つだけ前提として、名詞のクラスについて触れておく必要がある。この問題が、親族名称の分析にも係ってくるのである。

テンボ語、そして一般にバンツー系の言語はクラス言語であり、名詞は、その形態・統語・意味的基準により幾つかのクラスに分かれている。テンボ語では、名詞のクラスは全部で２０あり、例えば múlumé 1「男sg.」、bálumé 2「男pl.」という風に、２つのクラスの名詞がペアになり、一方が名詞の単数形、そして他方がその複数形を示す。名詞は、接頭辞＋語幹という構造をしており、名詞のクラスは、形態論的にはその接頭辞の部分で示される。ここでは mu- そして ba- が、それぞれ、その名詞が第１クラス（単数）、第２

クラス（複数）に属していることを示している。名詞のクラス番号は、名詞のあとに書く。

なお、名詞のクラスにはしばしばサブクラスがあり、これは、1a、2a のように a をつけて表わす。サブクラスというのは、名詞に本来あるべき接頭辞が見られないからである。例えば上の例だと、第１クラスのサブクラスの名詞は、接頭辞に mu- をとらない。それでも、それが第１クラスの名詞とわかるのは、例えば文法的一致が起こると、あくまで第１クラスの名詞として働くからである。第１クラスは、典型的に人間名詞を含むクラスであり、そして親族名称は、第１クラスのサブクラスのものが多いという特徴がある。

以下、エゴに近い順に、日本語との対比で話を進める。

2 「父」

(1) a. tatá 1a, bátatá 2a 「私の父」

b. éhó 1a, béhó 2a 「あなたの父」

c. éshi 1a, béshi 2a 「彼（女）の父」

～éshe 1a, béshe 2a

名詞が２つ横に並んでいるが、これは上で名詞のクラスについて述べた時に触れたように、左側が単数形、そして右がその複数形である（どうして「父」に複数形があるかは、すぐあとで述べる）。ここの名詞はいずれも、単数形が tatá 1a、éhó 1a、éshi～éshe 1a のように接頭辞がφ(ゼロ)で、第１クラスのサブクラスに属している。複数形も実は第２クラスのサブクラスなのであるが、この場合は接頭辞が bá- なので、普通の第２クラスとの違いは表面上見えない。複数形の構成は、bá-tatá→bátatá、bá-éhó→béhó、bá-éshi→béshi～bá-éshe→béshe のようである。

まず、この「父」で注意すべきは、「父」という一般的用語はなく、人称によって形が変わるという点である（エゴの性による区別はない）。つまり、tatá と言えば「私の父」であり、éhó と言えば「あなたの父」である。ここには、英語や日本語にあるような「私の」とか「あなたの」といった所有形容詞は現れない。そういったものが語幹の中に組み込まれてしまっているのである。この３つの単語をいくら分析しても、そこに所有形容詞の部分を抽出することは不可能である。

ただし、よく見れば、éhó「あなたの父」と éshi～éshe「彼（女）の父」は、よく似ている。どちらも é で始まり、次に無声の摩擦音が来ている。現在のテンボ語では環境は乱

れているが、それでもおおむね h と sh [=ʃ] は相補分布にあると言えるので（h は一般に、母音 u、o、a の前、そして sh は i、e の前で現れる）、違いは語末の母音のみである（「彼（女）の父」の éshi～éshe は、éshe の方が本来の形であるが、テンボ語では語末の e は、i になる傾向があるので éshi と言う人が多い。同様に o も語末で u になる傾向があるので、éhú という発音も可能である。ただし、これは éshi より少ない）。これはバンツー祖語では *ɟcáu 「あなたの父」、*ɟcái 「彼（女）の父」の可能性が示唆されている。

さて、「父」に複数形があるということの意味だが、これは「父」が、たんに本来の父のみならず、父方のオジも指すからである。つまり、父の兄、弟は父と同一カテゴリーに属するのである。同様に、これは第３節で述べることであるが、「母」もたんに本来の母のみならず、母方のオバ、すなわち母の姉妹をも指す。このことは、少なくとも、この辺りのバンツー諸語では非常に基本的なことであり、テンボ語のみならず、フンデ語やシ語などの部族語、そして、この地域の共通語として用いられているスワヒリ語でも同様である。

ただし、父および父方のオジが同じ用語で示されると言っても、それはカテゴリーとして同一であるというだけで、違いははっきりとしている。実際、単数形の tatá が指すのは、もっぱら本来の父である。父の兄弟は、「父」に「大きい、年上の」「小さい、年下の」という形容詞をつけて次のように言う。[2)]

(2) a. tata múkulu 1a̲, bátata bákulu 2a̲ 「私の大きい父」すなわち「父の兄」
tata mútóto 1a̲, bátata bátóto 2a̲ 「私の小さい父」すなわち「父の弟」
b. éhó múkulu 1a̲, béhó bákulu 2a̲ 「あなたの大きい父」すなわち「父の兄」
éhó mútóto 1a̲, béhó bátóto 2a̲ 「あなたの小さい父」すなわち「父の弟」
c. éshi múkulu 1a̲, béshi bákulu 2a̲ 「彼（女）の大きい父」すなわち「父の兄」
～éshe múkulu 1a̲, béshe bákulu 2a̲
éshi mútóto 1a̲, béshi bátóto 2a̲ 「彼（女）の小さい父」すなわち「父の弟」
～éshe mútóto 1a̲, béshe bátóto 2a̲

テンボ語、そして一般にバンツー諸語では、形容詞は名詞のあとに来、その構造は名詞同様、接頭辞＋語幹である。ここの例では、語幹は -kulu 「大きい、年上の」と -tóto

「小さい、年下の」である。接頭辞は、その形容詞が修飾する名詞のクラスに応じて変わる。ここでは、tatá「私の父」などの単数形が 1a クラス（これは第１クラスのサブクラス）なので、第１クラスの mu- をとっている。そして名詞が bátatá 2a 「私の父たち」などの複数形になると、形容詞の接頭辞もそれに応じて ba- となる。なお、(2)の例で、tatá、bátatá の最後の声調が下がるのは、あとに高声調の接頭辞で始まる形容詞が続くためである。ただし、éhó、béhó では２音節とも高いので、高声調の接頭辞で始まる形容詞が続いても変化はない。注意すべきは、「私の父」「あなたの父」「彼（女）の父」のいずれの場合も、「大きい」「小さい」の区別があるということだ。

ちなみにスワヒリ語（以下スワヒリ語という場合は、特別な断りがない限りは、ザイール東部で話されているスワヒリ語を指す）でも、父方のオジは baba mukubwa「大きい父」、baba mudogo「小さい父」のように、「大きい」「小さい」という形容詞をつけて区別する。ただしスワヒリ語では、父の人称は語幹の中に組み込まれていないので、「私の父の兄」「私の父の弟」は、それぞれ baba yangu mukubwa「父・私の・大きい」、baba yangu mudogo「父・私の・小さい」という風に、「私の」「あなたの」「彼（女）の」という所有形容詞をつけて区別しなければならない。

３　「母」

「母」も、人称による区別があること、および、「年上」「年下」の区別により母の姉妹をも表わすことは、「父」の場合と同様である。ただし、テンボ族では一夫多妻婚が行われており、このことが「母」の場合は関係してくることが「父」の場合とは異なる。

まず、「母」の名称を示す。

(3) a. mamá 1a, bámamá 2a 「私の母」
　　(=malí 1a, bámalí 2a)
　b. nyókó 1a, bányókó 2a 「あなたの母」
　c. nyíná 1a, bányíná 2a 「彼（女）の母」

「私の母」は mamá と malí の２つの形がある。どちらも同じ意味であるが、malí の方が本来の形ではないかと思われる。テンボ語の方言のなかでも東部のムブグ方言ではもっぱら malí であるが、街道沿いの西部のブニャキリ方言では mamá と言う人が多い。この

mamá という形は、おそらくスワヒリ語の影響を受けた形ではないかと思われる。

「母」も「父」同様、名称に人称が組み込まれていて、これを容易に引き離すことはできない。この人称による区別は、何回も述べるようだが、バンツー諸語では基本的なことで、スワヒリ語のような言語でも、母の場合は古形では mama「私の母」、nyoko「あなたの母」、nina「彼（女）の母」という用語がある（ただし、現在では、mama yangu「私の母」、mama yako「あなたの母」、mama yake「彼（女）の母」という風に、人称は名詞に所有形容詞をつけて表わす）。

「母」に複数形があることは、「父」と同様である。一夫多妻婚の場合も同じ用語が用いられるのだが、まず一夫一婦婚の場合を述べる。この場合は「父」と全く同様である。

(4) a. mama múkulu 1a, bámama bákulu 2a 「私の大きい母」すなわち「母の姉」
(=mali múkulu 1a, bámali bákulu 2a)
mama mútóto 1a, bámama bátóto 2a 「私の小さい母」すなわち「母の妹」
(=mali mútóto 1a, bámali bátóto 2a)
b. nyókó múkulu 1a, bányókó bákulu 2a 「あなたの大きい母」すなわち「母の姉」
nyókó mútóto 1a, bányókó bátóto 2a 「あなたの小さい母」すなわち「母の妹」
c. nyíná múkulu 1a, bányíná bákulu 2a 「彼（女）の大きい母」すなわち「母の姉」
nyíná mútóto 1a, bányíná bátóto 2a 「彼（女）の小さい母」すなわち「母の妹」

今(4)で示した用語は、たんに「母」の姉妹の年長関係のみならず、一夫多妻婚における夫の妻間の関係にも適用される。夫の複数の妻ということは、子供から見れば、父親の妻たちということで、それも自分の母たちということになる。例えば、自分の母が第２婦人だったら、第１婦人は、「大きい母」、第３婦人は「小さい母」ということになる。この場合の「大きい」「小さい」という関係は、実際の年齢ではなく、先に結婚したか、あとに結婚したかという順番関係である。

４　「親」

テンボ語で「親」は múbuchí 1、bábuchí 2 である。この語は、子供から見ればもっぱら実際の親、すなわち実の親を指すようである。ただし一般的には、「子供をもうけた人間（男あるいは女）」の意味である。動詞語根 -bùt-「産む、子供をもうける」から派生

されている（mú-bùt-í→múbuchí、bá-bùt-í→bábuchí）。この動詞は、母親のみならず父親も主語になることからもわかるように、たんに「産む、出産する」といった直接の出産行為のみならず、広く「子供をもうける」と訳した方がいい用例を含むものである。この -bùt- からは、多くの語が派生されるが、ここに関連するものを(5)にいくつか挙げておく。

(5) -bùt- 「産む、子供をもうける」

a. múbuchí 1、bábuchí 2 「親」

b. ébutá 5, (mábutá 6) 「出産」

c. lúbutá 11, ḿbutá 10 「出産回数」

d. ébusí 5, mábusí 6 「動物の雌」

e. ḿbutó 9,10 「種」

f. múbutó 3 「同じリネージの生れであること」

g. ébutswá 5, mábutswá 6 「誕生」

5 「オジ」

テンボ語では、第２節で見たように、父方のオジは父のカテゴリーに入ってくるので、一般に「オジ」と言えば母方のオジを指す（父方のオジについては、第２節参照）。

(6) a. malumé 1a, bámalumé 2a 「私の母方のオジ」

b. nyókólumé 1a, bányókólumé 2a 「あなたの母方のオジ」

c. nálumé 1a, bánálumé 2a 「彼（女）の母方のオジ」

ここでも人称による区別がある。しかし、これらは、「父」や「母」と違って容易に分析可能である。次のようである。

(7) a. malumé ← mamá (～malí)「私の母sg.」+ múlumé 1 「男sg.」

bámalumé ← bá+malumé

b. nyókólumé ← nyókó「あなたの母sg.」+ múlumé 1 「男sg.」

bányókólumé ← bá+nyókólumé

c. nálumé ← nyíná「彼（女）の母sg.」+ múlumé 1 「男sg.」

bánálumé ← bá+nálumé

múlumé 1、bálumé 2 というのは一般に「男」のことであるが、この名詞語幹 -lumé は、しばしば「男性の」という風に形容詞的に用いられる。つまり、母方のオジは、「男お母さん」という言い方なのである。これはスワヒリ語では mujomba 1、wajomba と言い、人称による区別がなく、かつ「男性の」という複合語的要素は現れないが、他の多くの言語ではテンボ語同様、「男お母さん」という表現を用いる。例えばフンデ語では、(8)のようである。[3)]

(8) a. malûme 1a, bomalûme 2a 「私の母方のオジ」
b. nyokolûme 1a, bonyokolûme 2a 「あなたの母方のオジ」
c. nelûme 1a, bonelûme 2a 「彼（女）の母方のオジ」

6 「オバ」

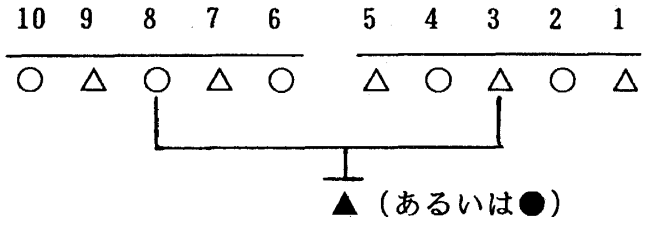
第３節で述べたように、テンボ語では、母方のオバは「母」のカテゴリーであるから、彼らにとって「オバ」というのは父方のオバのことである（母方のオバは、第３節参照）。その語構成は「オジ」同様、「母」に由来する ma-、nyókó-、ná- を用い、それに後半部分の要素として -shenge を加える。この -shenge という要素は、３つの人称に共通することから、「父方のオバ」の意味を付与できそうである。前半の部分は、恐らく人称を示すのに用いられているのであろう。この -shenge という要素は、また第１５節で述べる、父方のオバから見た「オイ」「メイ」にも、その構成要素として現れる。なお、ブルンディのルンディ語では、sengé のみで「私の父方のオバ」を表わし、māsenge は北部地方の方言形となっている。スワヒリ語では「父方のオバ」は shangazi と言うが、これも語源的に関係あるであろう。

(9) a. mashenge 1a, bámashenge 2a 「私の父方のオバ」
b. nyókóshenge 1a, bányókóshenge 2a 「あなたの父方のオバ」
c. náshenge 1a, bánáshenge 2a 「彼（女）の父方のオバ」

7 「キョウダイ」「イトコ」

テンボ語の「キョウダイ」で注意すべき点は、まず、日本語ではイトコにあたる者も一部この範疇に入ってくるということである。ただし、これは、誰を「父」と言い、誰を「母」と言うかということの論理的帰結である。テンボ語でも、「父」の子供は自分のキョウダイであるし、また「母」の子供も自分のキョウダイである。ただ、この「父」「母」の範囲が日本語とは異なるだけである。つまり、第１節で見たように、父方のオジは父のカテゴリーであるから、その子供は、男であれ女であれ、「キョウダイ」である（これは、日本語ではイトコである）。同様に、第２節で見たように、母方のオバは母のカテゴリーであるから、その子供も、男であれ女であれ、「キョウダイ」である（これも、日本語ではイトコとなる）。

図１



ここで、「父」「母」のおさらいも兼ねて、図式で、「キョウダイ」の範囲を確定してみよう。図１で、○は女、△は男とする。$\overline{○△}$はキョウダイ関係、そして$\underset{\cup}{○△}$（あるいは○＝△）は、婚姻関係を示す。そして、キョウダイは右から順に生れたものとする。エゴは、黒の●あるいは▲で示す。従って、この図では、私の父は男３人、女２人の５人キョウダイ、そして私の母も、女３人、男２人の５人キョウダイで、父も母も３番目の子供ということになる。エゴは男でも女でもいい。

さて、私の本来の父は３、そして母は８であるが、１及び５も「父」（正確には、１は「大きい父」、５は「小さい父」）、そして６及び１０も「母」（正確には、６は「大きい母」、１０は「小さい母」）である。従って、１、５、６、１０の子供も、自分の「キョウダイ」ということになる。これは日本語では、すべてイトコである。

テンボ語にも「イトコ」はいる。しかし、これは、図１で言えば、２、４、７、９の子供である。２、４は父方のオバであり、７、９は母方のオジである。つまり、ここでも、オジ、オバの子供はイトコという論理は完遂している。ただ、そのオジ、オバの範囲が日本語とは異なるだけである。

人類学の用語で、交叉イトコ、平行イトコという用語がある。この用語を用いれば、テンボ語では、交叉イトコのみがイトコで、平行イトコはキョウダイということになる。「平行」というのは、系譜をたどる時に同じ性をたどるということであり、「交叉」というのは、性が交叉するということである。自分から出発して、父方でも母方でもいいが、系譜をたどってみると、例えば父方では１の人は、３から１へ行く時に性が平行している、つまり同じ性である。５の場合も同様である。それに対して、２、４の場合は３から行くと性が交叉する、つまり異なる。こういった人の子供が交叉イトコである。

同様に、母方でも６、１０の人は８の母と性が平行している。それに対して７、９は性が交叉している。つまり、これら７、９の子供がテンボ語ではイトコなのである。

従って、イトコは父方にも母方にもいるが、父方ではオバの子供のみがイトコであり、母方ではオジの子供のみがイトコである。テンボ語では、イトコは、父方でも母方でも、用語は１つで(10)のように言う。

(10) músála 1, básála 2 「イトコ」

以上見てきたように、テンボ語の「キョウダイ」は、たんに、日本語で言う父母の子供、すなわち本来の意味でのキョウダイのみならず、前節で述べたように、父方のオジの子、及び、母方のオバの子、すなわち平行イトコも含むものである。

この兄弟姉妹を指す語はテンボ語ではちょっと複雑である（用語は第８節から１１節で示す）。その要点を述べると、まず、エゴが男であるか女であるかによって用語が変わる。そして同じ用語が、エゴが男であるか女であるかによって「兄」になったり「姉」になったりするのである。これと関連して、もう一つ重要なポイントは、年上・年下の区別は、同じ性の人にしか働かないということである。性が異なると、年上・年下の区別はないのである。だから、男には兄と弟はいるが、姉あるいは妹として区別される者はいない。女キョウダイはひとまとめである。同様に、女は、姉と妹の区別はするが、男キョウダイは兄、弟の区別をせずに、一語で済ます。

なお、性および年上・年下の違いを区別をせずに一般的に「キョウダイ」と言いたい場合は、(11)のように言う。ただし、この用語は、スワヒリ語の ndugu「キョウダイ、同族人」に対応するもので、スワヒリ語同様、家族・親族内に留まらず、擬似的なキョウダイ関係を含めて、かなり広く用いられる。なお、これらの語は、名詞接頭辞の mú- のあとに

「起源」を表わす -nyá- がつき、さらにそのあとに語幹構成子音 -k- ととも所有形容詞語幹 -estu「われわれの」、-enyu「あなた方の」、-abu「彼（女）らの」が続くという構成になっている。意味は、「私の…」「あなたの…」「彼（女）の…」でありながら、表現としては「われわれの…」「あなた方の…」「彼（女）らの…」という風に、所有者が複数であることを前提としたものになっている。

(11) a. múnyáketsu 1, bányáketsu 2 「私のキョウダイ」
b. múnyákenyu 1, bányákenyu 2 「あなたのキョウダイ」
c. múnyákabu 1, bányákabu 2 「彼（女）のキョウダイ」

8 「兄」「姉」

前節で「キョウダイ」について述べたことを念頭において、まず、男にとっての「兄」と、女にとっての「姉」の場合を示す。

(12) エゴが男の場合
a. múkulu wanyí 1, bákulu banyí 2 「私の兄」
b. múkulu wau 1, bákulu bau 2 「あなたの兄」
c. múkulu wai 1, bákulu bai 2 「彼の兄」

(13) エゴが女の場合
a. múkulu wanyí 1, bákulu banyí 2 「私の姉」
b. múkulu wau 1, bákulu bau 2 「あなたの姉」
c. múkulu wai 1, bákulu bai 2 「彼女の姉」

これを見てもわかるように、同じ用語がエゴが男でも女でも用いられる。ただし、それが示す親族型(kin type)は異なる。しかし、言っていることはどちらも同じで、「キョウダイの中で、自分と同じ性の年上の者」ということである。

表現としては、múkulu という用語が用いられる。これは、第1節、2節で見たように、本来は「年上の」という形容詞（語幹は -kulu）である。ただ、テンボ語では形容詞は名詞同様、接頭辞＋語幹という形態論的構造をしており、かつこの接頭辞が名詞のものと同じ場合は、名詞と何ら変わるところがなく、名詞と同様に用いられるのである。従って、

ここでは「年上の者」の意味である。

その次に所有形容詞がついているが、これはこの場面では絶対必要なものである。もし、「私の」「あなたの」などという所有形容詞がつかなかったら、この múkulu は、親族用語としてではなく、たんに普通名詞として「年配の人、偉い人」の意味になってしまう。

なお、所有形容詞は、数形容詞 -ngá「いくつの」などと同様、修飾する名詞の最後の音節の声調が高い場合は（ただし、最後の２音節が高高の場合は除く）、それを下げるのが普通であるが、単数名詞に係る場合は、その名詞の最後の音節の声調が低いと、逆に高くすることがある。従って、múkulu wanyí「私の兄、あるいは姉」は、しばしば múkulú wanyí と発音される。普通は、こういった変化は本来の声調ではないと考えられているが、あとで見るように、名詞（特に親族名称）によっては、こういった発音が日常化している場合がある。ただし、複数名詞に係る場合は、通常こういった変化は生じない。

ザイールのスワヒリ語でも、「兄」「姉」の表現は、(14)に見るようにテンボ語と同じである。

(14) a. mukubwa yangu, bakubwa yangu 「私の年上の者、すなわち男にとっての兄、女にとっての姉」

b. mukubwa yako, bakubwa yako 「あなたの年上の者、すなわち男にとっての兄、女にとっての姉」

c. mukubwa yake, bakubwa yake 「彼（女）の年上の者、すなわち男にとっての兄、女にとっての姉」

9 「弟」「妹」

「弟」「妹」も「兄」「姉」同様、エゴが男であれ女であれ同じ用語が用いられる。そして、エゴが男ならば「弟」、そしてエゴが女ならば「妹」を指す。

(15) エゴが男の場合

a. múlumuna wanyí 1, bálumuna banyí 2 「私の弟」

b. múlumuna wau 1, bálumuna bau 2 「あなたの弟」

c. múlumuna wai 1, bálumuna bai 2 「彼の弟」

(16) エゴが女の場合

a. múlumuna wanyí 1, bálumuna banyí 2 「私の妹」

b. múlumuna wau 1, bálumuna bau 2 「あなたの妹」

c. múlumuna wai 1, bálumuna bai 2 「彼女の妹」

この múlumúná という用語は、親族関係にしか用いられないが、ここでも所有形容詞は必要である（もし所有形容詞がないと、múkulu 同様、形容詞的にとられる）。なお、この語は、それのみでは múlumúná という風に最後の２音節の声調が高高であるが、あとに形容詞が来ると２音節とも声調が下がる。こういった例は、テンボ語ではこれが唯一のものである。

これもスワヒリ語では、テンボ語同様、次のように言う。

(17) a. mudogo yangu, badogo yangu 「私の年下の者、すなわち男にとっての弟、女にとっての妹」

b. mudogo yako, badogo yako 「あなたの年下の者、すなわち男にとっての弟、女にとっての妹」

c. mudogo yake, badogo yake 「彼（女）の年下の者、すなわち男にとっての弟、女にとっての妹」

１０　「女キョウダイ」

テンボ語で、女性の年長性を区別せずに、たんに「女キョウダイ」（英語でいう sister）という言い方をするのは男のみである。女は、女キョウダイに対しては、必ず、姉か妹かをはっきりさせねばならない。同様に、男も、男キョウダイに対しては、兄か弟かの年長性をはっきりさせねばならないから、たんに「男キョウダイ」（英語でいう brother）という言い方はしない。

それで、女キョウダイであるが、これは次のように言う。

(18) a. mwálí wetsu 1, báli betsu 2 「私の女キョウダイ」

b. mwálí wenyu 1, báli benyu 2 「あなたの女キョウダイ」

c. mwálí wabu 1, báli babu 2 「彼の女キョウダイ」

mwáli 1, báli 2 というのは、それだけで用いれば、「娘」のことである。この「娘」という意味は、「私の」「あなたの」といった所有形容詞をつければ、よりはっきりとする（mwálí wanyí「私の娘」、mwálí wau「あなたの娘」、mwálí wai「彼（女）の娘」。第１４節参照）。しかし、ここは、「私の…」の意味ながら、表現としては「われわれの…」となっている。「あなたの…」「彼の…」の場合も同様に、それぞれ「あなた方の…」「彼らの…」である。所有形容詞を「私の」にするか「われわれの」にするかの違いは重要である。ついでながら、mwáli の声調は、第８節で述べたように、あとに所有形容詞がついても本来変化しないはずであるが、単数形の場合は mwálí という風に最後を高く発音することが多い。また稀に複数形も bálí betsu などとなる（さらに、bálí wetsu などという、名詞が複数形なのに、修飾する所有形容詞は単数形といった形もある！）。

恐らく、男性のキョウダイにとって女キョウダイは、自分たちで共有する女たちといった感じではないかと思われる。それに対して、両親にとって娘とは、自分の娘以外なにものでもない。誰とも共有したくない…。

スワヒリ語に dada という用語があるが、これは一般には、エゴが男でも女でも「女キョウダイ」の意味で用いられることが多いが、テンボ族や南隣のシ族の人間が話す時は、姉、妹を区別せずに、男にとっての女キョウダイという意味でしか用いない。要するに、彼らの言語表現と同じ用法である。

１１　「男キョウダイ」

男にとって、女キョウダイは、その年長性を区別しないのと同様、女にとっても男キョウダイは、兄、弟を区別せず一語で済ます。

(19) a. múshisha wetsu 1, báshisha betsu 2 「私の男キョウダイ」
　　b. múshisha wenyu 1, báshisha benyu 2 「あなたの男キョウダイ」
　　c. múshisha wabu 1, báshisha babu 2 「彼女の男キョウダイ」

ここでも、「私の」の代わりに「われわれの」が、同様に「あなたの」の代わりに「あなた方の」、そして「彼女の」の代わりに「彼女らの」が用いられている。ただし、意味は、それぞれ「私の」「あなたの」「彼女の」ということである。なお múshishá 1, báshishá 2 は、「女から見た男キョウダイ」のことであるが、この単語はこの親族用語とし

てしか用いられない。単数形では、声調はしばしば múshishá wetsu などとなる。

１２　「夫」

(20) a. éba wanyí 1a, béba banyí 2a 「私の夫」
　　(ébânyí 1a, bébânyí 2a)
　　b. éba wau 1a, béba bau 2a 「あなたの夫」
　　(ébâu 1a, bébâu 2a)
　　c. éba wai 1a, béba bai 2a 「彼女の夫」
　　(ébâi 1a, bébâi 2a)

語彙調査で「夫」という用語を求めれば、éba という答えが返ってくるが、これは「彼女の夫」ということで、「私の夫」「あなたの夫」という場合は、必ず所有形容詞をつけなければならない（「彼女の夫」は、éba でも 所有形容詞をつけた éba wai でもいい）。この名詞と所有形容詞の組み合わせは、日常の発音では、多くの場合、（ ）の中のようになる。この発音は、例えば ébânyí の場合は、éba wanyí→ébá wanyí→ébâ:nyí→ébânyí のような変化を辿ったものである。

なお、女性は１度に２人以上の夫を持てないから、この用語には通常、複数形はない（もし用いれば、自分は誰とでも寝る売春婦であると公言しているようなものである）。ただし、一夫多妻婚はあるから、夫を共有する妻たちを念頭において、éba wetsu「われわれの夫」、éba wenyu「あなた方の夫」、éba wabu「彼女らの夫」という表現は可能である。もっとも、これらが現実に用いられることは稀であろう。

１３　「妻」

(21) a. múkasi wanyí 1, bákasi banyí 2 「私の妻」
　　(múkas(y)ânyí 1, bákas(y)ânyí 2)
　　b. múkasi wau 1, bákasi bau 2 「あなたの妻」
　　(múkas(y)âu 1, bákas(y)âu 2)
　　c. múkasi wai 1, bákasi bai 2 「彼の妻」
　　(múkas(y)âi 1, bákas(y)âi 2)

テンボ語では、他の多くのバンツー諸語同様、múkasi 1, bákasi 2 は「女性」「妻」の２つの意味で用いられる。そういうこともあって、この単語も「妻」の意味では、所有形容詞なしでは用いられない。テンボ族は、一夫多妻の婚姻制度を持っているので、「妻」に複数形があることの問題は生じない。発音は、多くの場合、（ ）の中のようになる。この発音は、例えば múkasyânyí の場合は、múkasi wanyí→múkasí wanyí→múkasyâ:nyí→múkasyânyí のような変化を辿ったものである。さらにこれらの形で y の音が消えて、múkasânyí、múkasâu、múkasâi などと発音する人もいる。

ちなみに、一夫多妻婚において、夫を共有する妻同士（英語の co-wife、フランス語の co-épouse）のみを表わす語はない。(22)のように表現はできるのだが、その意味は、一般的には「同僚」である。男が用いれば、仕事上の同僚などを指すが、女が用いれば、「共妻」をも表わしうる。現実には、その用法がほとんどであろう。

(22) a. múlíketsu 1, bálíketsu 2 「私の同僚」「私の共妻」
　　b. múlíkenyu 1, bálíkenyu 2 「あなたの同僚」「あなたの共妻」
　　c. múlíkabu 1, bálíkabu 2 「彼（女）の同僚」「彼女の共妻」

これらの語は、第７節の(11)で挙げた語とよく対比的に用いられる。(11)は血縁関係を表わしているのに対して、(22)は、いわば他人である。この(22)は、スワヒリ語の mwenzetu、wenzetu 「私の同僚」などに相当するもので、スワヒリ語同様、表現としては「われわれの」「あなた方の」「彼（女）らの」となっている。

なお、第１夫人、第２夫人などを表わすのは、一般的な序数詞表現を用い、固有の用語はない。

１４　「子供」

「子供」は、「父」「母」の対概念である。図１で、エゴにとって、３のみならず、１、５も「父」であるが、このことは、１、５から見れば、３の子供も自分の子供ということになる。もちろん、１にとって５の子供も自分の子供であり、また、５にとって１の子供も自分の子供である。同様に、図１で、６にとっては、たんに本来の自分の子供のみならず、８、１０の子供も自分の子供であり、また８にとっては６、１０の子供も、そして１０にとっては６、８の子供も自分の子供である。これは要するに、平行イトコはキョウ

ダイであるということを、親の立場から述べているのに過ぎない。自分を親と呼ぶ者は、親から見れば子供なのである。

(23) mwaná 1, baná 2 「子供」

この用語は、所有形容詞がつかなければ用いられないということはない。しかし現実の用法では、ほとんどもっぱら所有形容詞をつけた形で用いられる（もしつかなければ、３人称として「彼（女）の子供」ということになる）。なお、通常の会話調では、単数形の発音は（ ）のようになる。これは例えば mwanânyí では、mwana wanyí→mwaná wanyí→mwanâ:nyí→mwanânyí のような変化を辿ったものである。

(24) a. mwana wanyí 1, bana banyí 2 「私の子供」
(mwanânyí 1)
b. mwana wau 1, bana bau 2 「あなたの子供」
(mwanâu 1)
c. mwana wai 1, bana bai 2 「彼（女）の子供」
(mwanâi 1)

「息子」は múála 1, báála 2、「娘」は mwáli 1, báli 2 であるが、これも実際には所有形容詞をつけて用いられる。ただし、いずれの場合も、もし所有形容詞をつけなければ、３人称の「彼（女）の」の意味にとられる。なお、mwáli 「娘」の声調は第９節で述べたように、単数所有形容詞がつくと普通 mwálí と高高に発音される。

(25) a. múála wanyí 1, báála banyí 2 「私の息子」
b. múála wau 1, báála bau 2 「あなたの息子」
c. múála wai 1, báála bai 2 「彼（女）の息子」
(26) a. mwálí wanyí 1, báli banyí 2 「私の娘」
b. mwálí wau 1, báli bau 2 「あなたの娘」
c. mwálí wai 1, báli bai 2 「彼（女）の娘」

１５　「オイ」「メイ」

「オイ」「メイ」は、「オジ」「オバ」の対概念である。これは日本語でもテンボ語でも同様であるが、テンボ語では「オジ」は母方にしかいないし、「オバ」は父方にしかいないように、「オイ」「メイ」というのは、エゴにとって自分と性の違うキョウダイの子供のみを指す（自分と性の同じキョウダイの子供は、「子供」である）。すなわち、男にとって「オイ」「メイ」は女キョウダイの子供のことであるし、女にとって「オイ」「メイ」とは男キョウダイの子供のことである。

(27) エゴが男の場合

mwiwá 1, bewá 2 「女キョウダイの子供」

(28) エゴが女の場合

mushengéshánú 1, bashengéshánú 2 「男キョウダイの子供」

なお(28)は、mu-shenge+éshánú、ba-shenge+éshánú と分析でき、ここにも第５節で見た「父方のオバ」の要素 -shenge が現れる（後半の éshánú は éshánú 9,10 「メリケン粉」と同音であるが、関係はないと思われる）。「父方のオバ」と、エゴが女の場合の「男キョウダイの子供」とは対概念であるので、この -shenge は、元々はこれのみで「父方のオバ」として用いられていたのかもしれない。

１６　「祖父」「祖母」

(29) a. hokulú 1a, báhokulú 2a 「祖父（父方、母方）」

b. nyókulu 1a, bányókulu 2a 「祖母（父方、母方）」

c. múaká 1a, bámúaká 2a 「祖母（父方、母方）」

「祖父」「祖母」には、父方、母方の区別はない。また人称による区別もない。なお、(29b)の nyókulu と(29c)の múaká は全くの同意語である。

(29a,b)の hokulú と nyókulu は、それぞれ ho-kulú、nyó-kulu と分析できそうである。そして、この ho-、nyó- は、間違いなく、それぞれ éhó 1a「あなたの父」、nyókó 1a 「あなたの母」の第２音節に由来する。ただし、なぜテンボ語で、２人称の「あなたの」の形が一般化したのか、その理由は定かではない。また、後半部分は形容詞 -kulu「年上の」

ではないかと思われるが、これも定かではない。なお、(29c)の múaká は、一見、接頭辞が mú- の第1クラスの名詞のようであるが、複数形で、その前にさらに接頭辞 bá- がつくことから、この mú は語幹の一部であることがわかる。

フンデ語では(30)に見るように、「祖父」は「父」のように人称による区別が保たれている。

(30) a. tátakulu 1a, botátakulu 2a 「私の祖父」
b. xókulu 1a, boxókulu 2a 「あなたの祖父」
c. shékulu 1a, boshékulu 2a 「彼（女）の祖父」

また、フンデ語の「祖母」は(31)のようであり、テンボ語の múaká に対応する mukâka が1人称の形として出てくる。

(31) a. mukâka 1a, bomukâka 2a 「私の祖母」
b. nyokokûlu 1a, bonyokokûlu 2a 「あなたの祖母」
c. nekûlu 1a, bonekûlu 2a 「彼（女）の祖母」

１７ 「曾祖父」「曾祖母」

(32) a. hokulísá 1a, báhokulísá 2a 「曾祖父（父方、母方）」
b. nyókulísá 1a, bányókulísá 2a 「曾祖母（父方、母方）」

これらも、ho-kulísá、nyó-kulísá と分析できる。ここでも、「あなたの父」「あなたの母」に由来する形が他の人称にも一般化して用いられている。後半部分は、-kul-ísá のようであり、「年上の」を意味する形容詞語幹 -kulu が由来する動詞語根 -kul-「大きくなる、成長する」に -ísá （使役語尾か？）がついたもののようである。

１８ 「孫」「曾孫」「曾々孫」

(33) muhukulu (～mwihukulu) 1, behukulu 2 「孫」

「孫」は、人称、性、系統（父方あるいは母方）といった要素には関係しない。この語

幹は本来 -ihukulu であるが、初頭の母音 i は極めて弱く、普通は脱落して聞こえない。しかし、それが本来は i で始まることは、複数形の接頭辞が be- であることからもわかる。もし語幹が -hukulu だと、複数形は *bahukulu となるはずである。だだし、(35b)で見るように、この i を除いた形が再構造化によって生じていることも事実である。

(34) a. /ba-ihukulu/ → behukulu
b. */ba-huulu/ → *bahukulu

「曾孫」も、人称、性、系統に関係せず、用語は1つである。後半部分は「曾祖父」「曾祖母」の場合同様、-ísá の語尾がついている（35a. mu-ihukulu-ísá, 35b. ka-hukulu-ísá）。なお、(35a)と(35b)は同義語である。前者は、名詞を 1/2 クラスにおいたもの、そして後者は縮小クラスの 12/13 クラスにおいたものである（ただし、これは先に述べたように、本来あった語幹初頭の母音 i が脱落している）。

(35) a. mwihukulísá～muhukulísá 1, behukulísá 2 「曾孫」
b. kahukulísá 12, tsuhukulísá 13 「曾孫」

「曾々孫」は、孫の孫であるから、実際に、これを生きている間に見ることはまずないと思われるが、用語だけは用意されている。ただし、語源はわからない。

(36) kamvímví 12, tsumvímví 13 「曾々孫」

１９ 「義理の父」

「義理の父」というのは、配偶者（妻あるいは夫）の父親である。これは婚姻によって生じる関係である。

(37) a. tatasala 1a, bátatasala 2a 「私の義理の父」
b. hosala 1a, báhosala 2a 「あなたの義理の父」
c. sesala 1a, básesala 2a 「彼（女）の義理の父」

これらの語は(38)のように、２つの要素に分解することができる。

(38) a. tata+sala 「私の義理の父」
　　b. ho+sala 「あなたの義理の父」
　　c. se+sala 「彼（女）の義理の父」

前半部分は、第１節の「父」に由来することは明らかである。ただし、tatá、éhó、é-she～éshi が、それぞれ tata-、ho-、se- となっている。後半部分は、テンボ語のみからはわかりづらいが、バンツー祖語では *-bíad-à (～HH)と分析されている。*-bíad- は「産む」の意の動詞語根である。これはスワヒリ語では -za(1)- となるものである。

２０　「義理の母」

(39) a. masala 1a, bámasala 2a 「私の義理の母」
　　b. nyókósala 1a, bányókósala 2a 「あなたの義理の母」
　　c. násala 1a, bánásala 2a 「彼（女）の義理の母」

これらの語は(38)同様(40)のように、２つの要素に分解することができる。前半部分は、第２節の「母」である。

(40) a. ma+sala 「私の義理の母」
　　b. nyókó+sala 「あなたの義理の母」
　　c. ná+sala 「彼（女）の義理の母」

２１　「義理の息子」「義理の娘」

「義理の息子」は娘の夫、そして「義理の娘」は息子の妻である。(41b,c)は、いずれも「義理の娘」で、同義語である。ついでながら、義理の娘と父とは忌避関係にあり、嫁は義理の父がいる場には近づかないし、また道で出くわしそうになると、道を外れて、すれ違うのさえ避けることがある。

(41) a. múnga 1, bónga 2 「義理の息子」

b. mwasana 1, basana 2 「義理の娘」

c. mwálíkási 1, bálíkási 2 「義理の娘」

(=mwálikasi 1, bálikasi 2)

(41c)については、２つの声調のパターンがある。それぞれ、mw-álí+kási 1、b-álí+kási 2、mw-áli+kasi 1、b-áli+kasi 2 と分解できる。この前半部分は mwáli 1、báli 2「娘」であるが、後半の部分は múkasi 1, bákasi 2 「女、女性」の語幹である。この後半部分は、ちょうど múlumé 1, bálumé 2 「男、男性」の語幹 -lumé が「男性の」という意味の形容詞語幹として用いられるのと同等である。ただし、ここの場合は声調が -kási については逆になっている。実は、この２つの声調形は、新旧２つの形に対応していて、高高の方が古い形である。この古い形の声調形は、複合語ではしばしば保たれることがある（mbwákási 9,10「メス犬」などの例）。

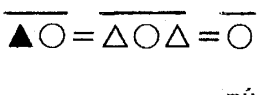
２２　「義理のキョウダイ」

「義理のキョウダイ」は、配偶者のキョウダイとその配偶者、そして、キョウダイの配偶者とそのキョウダイを指す。男の場合も女の場合もあるが、用語は１つである。なお、キョウダイは、日本語で言うキョウダイのみならず、平行イトコも含むものであるから、この「義理のキョウダイ」は、かなり広い範囲の人を含むことがわかる。そして、これは人がネットワークを形成する場合の大きな核となっている。

(42) múlamú 1, bálamú 2 「義理のキョウダイ」

なおエゴが男の場合、その姉妹の夫の男キョウダイの妻は、「女性の」を示す形容詞語幹 -kasi をつけて múlamukasi 1, bálamukasi 2 と呼ばれる。

図２

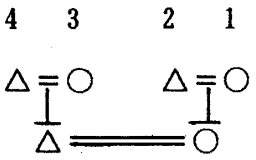


２３　「子供の配偶者の親」

日本語では、「子供の配偶者の親」は、直接的には表現しづらい関係である（呼び掛ける場合は、それが男の場合は、「お父さん」といったりするが、これは、自分の子供の配偶者のお父さん、ということで、自分の父親のことではない）。テンボ語では(43)のようである。この mányina というのは、図３において、１、２と３、４の関係のことである。この語は、má+nyina すなわち、少なくとも後半部分は nyíná la「彼（女）の母」と関係がありそうだが、確定的なことは何も言えない。

(43) mányina 1a, bámányina 2a 「子供の配偶者の親」

図３



２４　呼格

以上、テンボ語の親族用語について述べてきたが、これらはすべて、いわゆる親族名称であって、呼称ではない。テンボ語には、親族呼称というものは基本的になく、名称が用いられるのであるが、これには１つの特徴がある。それは、単語の最後の音節の声調が、高い場合は、下がるということである。もっとも、これは、たんに親族名称だけのことではなくて、すべての名詞がそうである。例えば、Málírá「涙」という名前の人がいたとすると、“オーイ、マリラ！”と呼び掛ける時は、Málíra! となる。mwana wanyí「私の子供 sg.」の場合も、é mwana wanyi!「私の子供よ！」となる（最初の é は、間投詞で、なくてもよい）。

第２節その他でも述べたように、テンボ語では、名詞に、それを修飾する形容詞が後続する場合、名詞の声調が変わる場合がある。しかし、最後の２音節が高高の場合は、唯一múlumúná （第９節参照）を例外として一切変わることはない。高高という連続が体系的に変化するのは、この呼び掛けの場合のみである。呼格という用語は、一般には形態論的な格変化をする言語について用いられるが、このテンボ語の変化も、声調による格変化とでも呼びうるものである。

なお、以下の語は特別な変化をする。tatá「私の父」と mamá「私の母」では、声調の変

化と同時に、母音の長さの変化も起こっている。しかも、声調の変化はたんに最後の高声調が下がるだけでなく、その前の低声調が高くなっている。これは mali でも同様だが、この場合は母音の長さに変化はない。múlumúná「（男からみた）弟、（女からみた）妹」は、呼格でも最後の２音節は、ひとまとめの行動を起こす。

(44) a. táata ！「私のお父さん！」
b. máama ！「私のお母さん！」
c. máli ！「私のお母さん！」
d. múlumuna ！「（男からみた）弟」「（女からみた）妹」

２５　終わりに

本稿は、アフリカ、ザイール東部に話されるバンツー系のテンボ語の親族名称について述べたものである。テンボ語のデータは、私が今から２０年程前に現地で得たものであるが、一度、１９８０年にまとめたテンボ語の語彙集（自家暫定版）に付録としてつけた以外は、その後ずっと放置されてきた。本稿は、そのリストをベースに、今私が自分の頭の中で覚えていることだけを、メモ代わりに記したものである。フィールドノートをめくればもっと肉付けをすることはできると思うが、ここでは断念した。

最後に、親族名称に関して、２つのことについて触れておく。第１は、名称の類別性についてである。本文で何回も述べてきたように、テンボ語では「父」や「母」などの用語は、それぞれ、本来の父や母のみならず、父方のオジや母方のオバをも指す。しかし、同一カテゴリーに分類するからと言って、テンボの人たちが、父と父方のオジを区別しない、あるいは区別できないということとは全く違う。実際、父と父の兄、弟は、「大きい」「小さい」という形容詞をつけるか、つけないかということで用語上区別される。また、「親」（múbuchí 1、bábuchí 2）は「父」と「母」のことだと言って、それで父方のオジや母方のオバを指したところで、実際には何の意味もないのである。

それよりももっと大きな問題は、例えばテンボ語の tatá という用語が、父と父の兄、そして弟を指す（「大きい」「小さい」と言うのは、付加形容詞であるから、その区別は二次的なものにすぎない）と言って、その意味としてこの３つの親族型を並列的に並べることだ。この方法は tatá の外延を示すにはいいが、意味作用という観点からは、テンボ語の実情にそぐわない。tatá という用語は、あくまでも自分の本来の父を指すのが第１で、

父方のオジは、そこから派生されて意味されているのだ（ハヤ語やウォロフ語の「小さい父」という表現は、そのことを端的に表わしている。注３参照）。テンボ族は伝統的に父系リネージごとに小集落をつくり住むが、父方のオジは同じ村に住むとはいえ自分と同じ家ではない。一つ屋根に住み、子供に一義的責任を負うのは、その子の直接の親である。

従って、問題は、なぜ違うものを同じ用語で指し示すのか、その効用性を問うことである。これは、私見によれば、テンボの人たちの、否、こういった体系を持つ人たちの優しさに関係すると思う。つまり、人間関係を何重にも取り巻き、お互いを支え合っているのだ。１人の人に何人もの父や母がいて、そして何人もの子供がいる。これは私には、上から下から人々が手を差し出してお互いを支え合っている姿に見える。たとえ、そこで手が一本切れても――例えば、父親が死んでも――その子を支える手はまだ幾つもあるのだ。たとえ、それが名前だけによる象徴的な支えであっても、日本などのように、親の死によって親子の関係がプツンと切れてしまうよりは、よほど精神的に救われるであろう。

親族名称に関して注意すべき第２点は、その文法的カテゴリーとしての特性である。つまり、多くの用語が、第１クラスのみならず、第１クラスのサブクラスである 1a クラスに入っているということである。しかしながら、例えばスワヒリ語では、標準スワヒリ語でも baba「父」、mama「母」などは一見 1a クラスであるかのようで、そうではなく第９クラス、いわゆる N クラス名詞なのである（「私の父」「私の母」は、それぞれ baba yangu、mama yangu であり、baba wangu、mama wangu とは言わない）。第９クラスは、特徴的に動物名詞を多く含むクラスであり、そして第１クラスは、典型的に人間部類クラスである。そして 1a クラスというのは、形態論的には第９クラスのようでありながら――つまり、接頭辞 mu- を取らず――、意味・統語的には第１クラスとして機能しているのである。と言うことは、1a クラスというのは、第９クラスと第１クラスを繋ぐクラスであって、第９クラスの人間名詞――これは恐らくかつては動物名詞の一部であった――がここを通って第１クラスへ入っていく中継地として機能している（あるいは、かつて機能していた）と考えられないだろうか。

バンツー諸語の親族用語は、名詞のクラスの研究にとって、興味あるデータを提供している。

参考文献

梶　茂樹

1980　Lexique tembo （自家版）.

1985　Lexique tembo I, tembo - swahili du Zaïre - français - Japonais, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

1992　Vocabulaire hunde, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

Rodegem, F.M.

1970　Dictionnaire rundi-français, Musée Royal de l'Afrique Centrale, Tervuren.

注

1）一般には、親族名称と親族呼称とを区別し、その両者をあわせて親族用語と言うことが多いようだが、テンボ語では、第２４節で見るように、実質的に親族呼称というものはないので、本稿では、親族名称と親族用語は、日常の用語法に従って、「名称」は物に対する名前、そして「用語」は特定の意味分野についての単語の意味で用いる。

2）ルワンダを挟んでザイール東部諸語と向き合う格好になるタンザニアのハヤ語(Haya)では、全体としてテンボ語の体系に似ていながら、父の兄弟は、その年長性に関係なくすべて、「小さい父」という表現をする。つまり、テンボ語やフンデ語で言う「大きい父」という言い方はないのである。私は最初はたんに、これは「小さい」という用語が一般化したのではないかと考えていたが、最近調査しているセネガルのウォロフ語でも状況は同じであると知るに及んで、次のように考えるようになった。すなわち、「小さい」というのは、本来の父ではないという意味であって、そこには年長性は関与してこない、と。つまり、たとえ父の兄であっても、本来の父ではないという意味で「小さい」のである。

3）ただフンデ語では(8)と同じ意味で、次のような表現もある。こちらの方はフンデ語の西に話されるニャンガ語に近い形になっている。

a. mántíre 1a, bomántíre 2a 「私の母方のオジ」

b. nyokontĭre 1a, bonyokontĭre 2a 「あなたの母方のオジ」

c. nentĭre 1a, bonentĭre 2a 「彼（女）の母方のオジ」